

へば、彌七いふ。今朝編めよと仰ありてよりやめよとの仰なきゆゑに、己が了簡をば用ひずして、かくの如しといふ。主人また理に伏し、とかくに汝がいふ處至極せり。此上は何事も爲めよきやうに働きくれよと頼む。爰にして彌七能々うけがひ、萬事己が心にまかせて入精するにより、田畠は他に倍して實り、其他なす事毎に皆徳ありて、いつしか此家の富む事、はじめとは十倍し、いよゝますゝ繁昌す。斯くして彌七此家に仕ふる事三年なりしが、一朝主に暇を乞ひ、そのまゝ忽然と出去りて、遂に行方を知らずといへり。つらくおもふに、此家の主人篤實の誠あるがゆゑに、神人かりに爰に來りて、富を得しめしならんかといひ傳ふと也。此家の末裔、今に大野村に横屋彌三兵衛といひて、子孫連綿して相續す。彼彌七があみたる長蔭も近き頃まで持傳へしが、天明七年二月二日の火災に焚燒せりとぞ。其外彌七が食せし御器、櫛笥或は手に觸れし品物などは、横屋が菩提所升形の西福寺に傳れり。此西福寺は、むかしは大野の近里觀音堂村にありしが、後金澤へ移れり。此寺の太鼓の筒は、大豆がらにて作りたり。是も彌七が作

なりといひ傳へたり。今の世に、おさな童のむかし物語に、彌七は寺の下男也といひならはせるは、彼寺に御器などの傳りし故なるべしといへり。一説には、西福寺の下僕なりと。又横屋彌三兵衛は西福寺の門徒なれば、此の縁故に依りて双方に奉公し居たりとも云ふ。或は云ふ。大野の横屋は、今彌三兵衛と彌三郎と兩家に成れり。大野にての傳説は、横屋は彌七が子孫七が子孫なりともいへり。龜尾記に、大野の横屋彌三兵衛が家に、彌七が歪とて今に至り珍藏す。といへり。其の時代は何れの頃ならんか。彌七が事は、今も世人さまざま膾炙すれど、傳話のみにて、其の事蹟をば正しく記載せし記録なきゆゑに、年曆時世は詳かならず。また今金澤にて、子供の親の意に違ひ、彼是己が氣まゝを申立つるをば彌七といへり。此の謔もかの彌七が故事より起りたるものなりとぞ。おもふにいもほり藤五郎と此の彌七とは、誠に當國にての一畸人なりといふべし。

○津田氏別莊跡

龜尾記に云ふ。津田玄蕃の別莊とて、能き亭あり。別莊内に地藏尊あり。甚だ古像にて、大同二年より爰に在ると云

傳へたりとぞ。此の別莊は、揚場より長田天神へ行く北側にて、世人津田の下屋敷と呼べり。今は遺跡のみ。

○尻高七兵衛墳

龜尾記に云ふ。揚場津田別莊の地邊に尻高七兵衛が塚といふあり。然るに如何なりしにや今はなし。尻高七兵衛は上杉謙信の士なり。天正年中に謙信能登の畠山を潰さんとて、七尾城を攻む。于時信長公、柴田勝家等をして七尾の長を救はしめん爲め、上方より發向す。謙信是を逐うて加賀國へ出勢し、此所にて一揆原の爲に支へられ、放火して戦ふ内、尻高七兵衛爰にて戦死せし遺墳也と云ふ。此尻高の子孫は、七高紺屋とて近年まで仁隨寺前に居住し、今は大椿堂といふ筆工となり、七高屋平三郎といへり。とあり。按ずるに、右尻高七兵衛が事は、如何なる記録に出でたりけん。織田軍記に、天正十年六月北國の諸將、此の春信長公甲州へ出馬の隙を伺ひ、越後の景勝越中の國人共を語らひ一揆を起させ、當國魚津城を相構へ、尻高左京進、黒金孫左衛門兩將に多勢を屬けて籠め置かしむ。是に依つて彼の表退治の爲に、柴田修理進勝家、佐久間玄蕃允盛政、佐々内

藏助成政、前田又左衛門利家四將、數千の人数を率して越中へ相働き、進んで魚津城を取巻く。城兵頻りに越後へ援兵を乞ふに依つて、景勝多勢を率し、天神山に備を堅むる處、森長一越後へ働く由注進に依つて、景勝天神山の陣を拂うて越後へ引退く。魚津の城兵力を失ひ、早々和議をなして城を渡し、悉く退散す。とあり。右尻高左京進が事は、尻高七兵衛が事實となして傳へ誤りたるならんか。加州にて尻高七兵衛といふ人柴田勝家等と合戦におよびたる事、諸記録中に所見なし。